

## グローバルな権力、グローバルな世界、グローバルな哲学

ハンス・スルガ

翻訳：小野 純一

グローバル化はさしあたり人間的権力が拡大する過程であり、この過程は技術的諸技能と科学技術的諸媒体をもって動かされるとしておく。そのようなものとして成り立っているグローバル化した世界では人間の権力行使が様々な諸事情、状況、事物事象にますます行き渡る。日々、地上の世界的大都市でジレンマが明白となる。巨大都市の摩天楼や高層建築の深い峡谷を流れる往来と交通網は、僅かな違いはあっても世界中どこも同じであり、人間的権力展開の記念物である。また同時に自分自身の所業に直面して人間の屈従化と矮小化が裏付けられている。これによって人間の自由と独立、もちろん人間的権力、そして現実にはその全体的存立が、目に見えて疑わしくなっている。巨大化され圧倒的なこの世界で人間であるとは一体どういうことか。哲学的思考はそのように挑戦されている。しかし、グローバル化の時代に哲学は（まだ）何を成し遂げられるのか。真にグローバルな哲学的考察はいかなるものだろうか。この問いに向かうには、はじめに幾つかの概念を注解せねばならない。

### 権力

権力 [Macht] は、語源的には行為する能力を意味する（これは英語の power もフランス語の pouvoir も同様である。これらはラテン語の potentia から派生し、行動と行為の可能性を表す）。ドイツ語の用法で「権力 [Macht]」は、もちろんより狭い意味で「する [machen]」という人間的振る舞いの能力として、つまり、人間の方向性や性格のなかでそのような振る舞いを決定する能力として理解される。たとえば国家が法を制定することで、国家は国民の言動を規制し、このような仕方でも権力を行使する。母は子に権力を行使して医者に連れて行く。教師は生徒を勉強するよう促すことで。公務員は命令を部下に、あるいは指示を一般市民に与えることで。権力概念を規定する仕方は他にもあるので、それをここで早めに列挙して解決し、再三言及しないで済むようにしておく。

(1) ある人に権力を用いる権限がある場合、この人は権力を有する。一国の大統領は省庁を通して権力を行使できる。これはしかし大統領が本当にその能力があることを意味しない。権力者は、権限を有するものとしても、無力なものとしても示されうるのだ。本来の権力は、おそらく、他者の手のうちにあるのだ。

(2) 権力に従うということが人間固有の能力であるというもう一つの概念の方がより重要である。後期のフーコーは、他者の行動を対象とする人間的行動として、権力を記述する。前期フーコーは行動を権力の形式として考察しており、権力は人間の行動を超え出ると見なしている。

(3) ハンナ・アーレントは、協調の行動として権力を、つまり、共に行動することでしか現実化されないものについて語ることで、さらにその一歩先に行く。これは確かに狭すぎる。というのも、父親についても、父が我が子に権力を有しかつ行使するとも言えるからだ。その上、アーレントの規定は、個々の人間の行動と人間の諸集団の権力行使とのあいだの関係を覆い隠している。しかし、アーレントと後期フーコーによって共有される人間行動としての権力行使の規定は、私には狭すぎると思える。我々は「自然」や災害や、病気や気象変動などが我々に対する権力を持つと言わないのだろうか<sup>1</sup>。人間の行為も人間が引き起こしたのではない出来事もともに我々に対して権力を行使するが、諸事情、事物事象も同様に我々に権力を行使する。私のおかれた状況は行動するよう私を強制

する。つまり、状況が私に対して権力を行使しているのだ。我々を分割する壁は我々の振る舞いを規定し、そのようにして我々に対して権力を行使するのだ。私が行っている概念規定は、人間ならざる権力が行使可能なことを明確に許容するものである。それゆえ私は、人間の権力が行使される際、より特別に人間的権力に言及する。アレントとフーコーの概念規定は、人間による権力と人間によらない権力がともに作用することを理解する妨げになっている。

(4) 最後にもう一つ別の権力概念がある。それが前提にしているのは、権力が常に何かによって、あるいは誰かによって“別の”何か、または“別の”誰かに行使されることである。例えば、ある人によって、ある別の人に、またはある人によって何かに対して、さらにはある事物から別の事物に対しての行使である。これに対して、私はある人が権力を自分自身に対しても行使しうる、つまり権力行使は自己関与の一つでありうることを認める。また、このことこそ私には重要なのである。なぜなら、私は哲学を特に自己支配の形式として、すなわち自己への権限付与として見たいからである。ただ私は権力が結局は常に人間に対し行使されることを前提にするため、この第四に提案された概念よりも私の概念規定の方が狭いものである。

ここで私は権力の「正確な」概念を見出すことを全く問題にしてはいない。「権力」という語は様々な仕方で正当に使用されうる。ただ、どの場合でもこの語がどう用いられているか明確でなければならない。というのも、いずれの場合もしばしば不正確さが生じるからだ。ここで私が問題にしているのは、全く実践的なことだが、グローバル化した世界における権力を見通し良く記述することを我々に許すのはどんな用法かという問いだけである。どのような概念なら権力の多様な水準と現実化を精確に提示可能にするかが問題なのだ。権力に対する人間の振る舞い、グローバルな諸制定の権力、この新しいグローバルな現実における哲学の権力、もしくは無力が問題なのである。

多くの場合、人間関係は権力関係である。つまり、人間的行動の多くは権力行使である。ニーチェの後を継ぎ、フーコーはこのことを正しく見ていた。だからといって、すべての関係や行動をそのように理解して良いということにはならない。見方を逆転しては意味がないだろう。だが、この見方は我々の振る舞いを根底から変えることができる。しかし、人間的関係、人間的行為が、権力行使を含むことは、これらが権力行使に、つまり人間的関係と人間的行為が権力行使としてのみ理解されるべきだということに還元できることを決して意味しない。人間的行動を冷笑的に理解することほど、私から程遠いものはない。我が子の幸せを心配して母はその行動へ動かされる。この心配が母に我が子への権力を行使させる。つまり、権力行使したいが母親の目的なのではないということだ。人間的権力行使の他の領域においても、おそらく同様と思われる。

人間的権力に加えて、自然の権力が我々に降りかかる場合の権力について私は言及する。しかし、自然の権力だけでなく、我々自身が創り出したものもまた、我々に対して権力を行使しうる。つまり壁は我々に対して権力を行使しうるのだ。我々を分割する壁の建設は、第一に、人間的行為の結果である。政権が自国民を囲い込むために壁を建設する。別の政権は、逆に、敵を外部に留めるために。ここでは権力行使は直接的に人間的行動として理解されうる。だが、一度、壁がそこに成立してしまうと、もはや人間的行動に依存しない現実を壁は有してしまうのだ。たとえ壁を建設した人間たちがもはやいなくとも、壁は効力を発揮する。このようにして、壁はもはや（いずれにしても、もはや直接には）人間に由来しないある権力を今や行使している。そして、同じことが我々によって創られた世界とその世界にある事物事象の全てについて言えるのである。

私は以上のように自然の権力と我々が産出し我々の手から離れてしまっているような諸権力を区別する。後者を私は端的に歴史的諸権力とも呼ぶ。なぜならこれは歴史的人間たちの所産であるからだ。それに応じて我々に対し権力を行使する事物の間で、歴史的に創出された事物と自然の事物とを区別し、さらに歴史的に創出された事物には装備 [Gerätschaften] という語を私は用いる<sup>2</sup>。これらの概念を用意すれば、グローバル化が歴史的な権力拡大の過程であり、この過程は歴史的に獲得された技能および歴史的に制作された装備でもって動かされていることが言及可能なのだ。加えて、人間の権力行使がこのようにして我々の装備が有する権力へ移行することを我々は確認できるのである。

人間の権力と事物の権力（自然の事物でも装備でも）は、本質的に相異なる。事物は純粹に因果律に則って権力を行使する。これは、諸事物の権力効果が完全に因果律に則って決定されているという意味ではない。というの

も、事物の因果関係に対し人間は様々な仕方で反応するからである。事物を神の徴と見る人々は、おそらくそれ相応の仕方で反応するだろうし、事物を自然主義的に理解する人々の振る舞いは本質的に異なるだろう。早魃に際し、人身御供をしようとする場合もあるだろうし、別の場合には灌漑施設を建設しようとする人々もいる。人間的権力行使もまた因果的効果を利用するのだ。しかし、これに加えて、人間の権力行使は意図という性格を持つ行動でもあるのだ。権力を行使することで我々は同時に特定の意図を達成しようとする。親は子に権力を行使して、我が子を自立した一人前の人間に育てようとする。公共の生において人間は権力を駆使して、成功しよう、裕福になろうとする。あるいは、有名になろうとしたり賞讃的になろうとしたりするし、権力行使にはその他無数の理由があるだろう。我々は政治的権力を利用して一つの国家を維持しようとしたり、他国を破壊しようとする。権力は通常、権力じたいを目指して行使されるのではない。権力への意志は存在するが、全ての権力行使がこの意志を例証してはいない。諸事物の権力は権力への意志でも何か他の意図のものでもない。世界は総じて権力への意志であるとニーチェが書き記すとき、彼は間違っていて見ていたと結論づけざるをえない。

## 権力の領域

親が子に、教師が生徒に、将校が軍隊に権力を行使するが、その権力は常に制限されている。親の権力はおそらくその手の届く範囲に限定される。教師の権力はその声の届く範囲に。兵士の権力はその命令が権威を持つ範囲に限定される。権力は行動する個々人の場合でその人の身体的な力 [Kraft]、社会での地位、心の状態、経験によって限定されている。しかし、我々が共同作業することで我々の権力の領域は拡大されうる。我々は一人では不可能な行為を共同で遂行する。行動の連鎖を形成することで、我々は自分たちの権力行使の領域を自分たち自身が見うる以上に拡大するのだ。共同作業は多くの形式を有する。迫り来る悪天候から収穫を守る場合、おそらく村では隣人を共同作業に呼ぶのに一言で足りるだろう。別の種類の共同での権力増大や拡大では、多様な計画と組織を必要とする。近代的な人間集団は洗練された方法で、たとえば交通システムのような非常に複雑な仕方で互いに力を合わせて共同作業することへ仕向けられるのだ。政治史は、人間的権力の大きさや射程の入れ替わりを通して特徴づけられる。族長は自分のすぐそばにいるものにしかその権力を行使しない。近代的な政府は、交通やコミュニケーションの可能性を徹底利用したり兵器システムを動員して、広い諸領域に権力を行使しうる。権力の領域が最終的に全地球に及んでいけば、グローバルな、あるいは惑星規模の権力について我々は語る。合衆国はそのようなグローバルな権力の一つである。

我々は新しい行動方法の発展を通して権力拡張を創出する。我々は、人々とより巧く付き合うために技術を学んで、抜け目ない言葉で彼らを説得する。人間の行動を意図した方向へ仕向けるため、脅迫や暴力の使用がいつ効果的なのかを我々は学ぶ。この類の権力行使は技術 [Kunst] を要する。私は古代ギリシア語の用法でこの言葉を用いており、権力を拡大する諸々の行動方法を諸技術 [Techniken] として語っている。権力拡張にはしばしば様々な種類の装備が必要である（英語ならこの場合、equipment というだろう）。私はこの装備を技術的媒体とも呼ぶ。なぜなら、その製造も使用も諸技術によってのみ可能だからだ。語り手は他の人たちに語ることで権力を行使する。拡声器はその声を、その声が届く範囲よりさらに遠くへもたらし、そのようにしてその権力の射程を拡張する。電流の助けを借りて語り手は最後にはおそらくそれどころか惑星規模でこの権力を拡大させうる。この達成のため、語り手は技術的媒体を必要とし、媒体は媒体で製作され使用される技術を要請するのだ。

## 権力の媒体

自然に生起しているもので、我々が権力拡張に利用する事物と、権力拡張の目的でわざわざ発明する装備を私は区別している。事物の権力があり、また装備の権力があり、これら二つは区別されるべきなのである。事物の権力は我々の先達にも明瞭であった。彼らはこの権力を儀式や供儀でもって制御しようと繰り返し試みてきた。これに対し、我々は自然を征服したと信じている。我々は自分たちが自然の権威を凌駕したと確信している。だが、これが事実かはまずこれから明らかにせねばならない。というのも、今日我々の脅威となっている自然環境の大災害に

において事物の権力が再び暴力的なものとして立ち現れているからだ。我々は本当に事物の権力を無力化できるのか。たとえ我々がこの問いに対しまだ十分には意識的でなくとも、我々によって製造された装備の権力の問題よりも我々はこの問題の方を依然とせずと良く理解している。装備が完全に我々の権力下にあると素朴な考え方を採用してみる。装備は我々固有の創造物ではないのか。だが、我々を分割する壁の例だけでも、我々の誤認を正してくれるだろう。

我々の諸技術を強化する科学技術の器具や装備は、自ずと成立するのではなく、技術的な行為によって製作されねばならない。その際、技術は科学技術を、科学技術はまた新しい技術を生み出す。しかし、技術と科学技術はいつも協力関係にあるのではないし、協力し合うとしてもいつも同一の仕方ではない。私は優れた話し手になる訓練をできるが、そのために私は必ずしも科学技術による器具を必要としない。私がそのような話し手になる訓練は、またこれ自体一つの権力行使である。訓練を通して私は私自身に対して権力を行使する。つまり、私自身の行動を決定するのだ。大規模な人間集団を組織するためには、もちろん自己決定的な権力行使だけでなくもっとさらに必要なものがある。例えば、データ集積、官庁、事務所といった科学技術的な装備である。世界的大都市における人間の流れを組織するためには、障壁、標識、国境、橋、交通手段、コミュニケーション手段、防犯カメラなどが必要である。我々の装備には多くの形式があり、作業用の道具、機械、器具、建築物、生産品、手段に分けることができる（現時点ではこの分割にまだ意義はない）。我々の先祖にとって未加工の原石は装備品であり、私の自転車、鉛筆、本も装備品である。コンピュータも携帯電話も電気剃刀機もそうだし、航空母艦、戦闘用ドローン、世界規模の監視システムもそうである。我々は高度に科学技術化された世界に生きており、つねに装備に囲まれている。これらは人類の長く紆余曲折を経た歩みのうえに生み出されてきたのだ。これらの事物を製造するには、製造者の自分自身に対する権力行使が必要であるし、このことはその使用にも当てはまる。これらの事物を生産したり使用する過程は権力行使の新しい諸形式を生み出す。最も単純な道具の製造自体でさえも巧みさと経験を必要とし、そのような道具の使用にもこのことは当てはまる。矢尻を作る先史時代の鍛冶職人はどのように金属を熱して形を作るべきか知っているはずだ。訓練された射手はまたどのように矢を弓につがえて放つか知っている一方、矢尻の製造についてはわずかしか知らないかもしれない。製造と使用における巧みさと経験は、どちらの場合も習得されねばならない。それゆえ鍛冶職人には自分の徒弟が、射手には助手がいる。近代の兵器製造者は、大規模経済の規則に従ってコンツェルンを運営しなければならない。兵器を用いる軍隊はその操作と制御において鍛えられていなければならない。技術も科学技術もこのように人間的な作業配分に貢献し、それにともなって最も小さく最も単純な形式に、特に近代的なグローバルな社会に、人間的社会の新しい秩序をもたらす。

装備の製造および使用は、少なからうと膨大であろうと人間の秩序づけられた共同作業を必要として、その結果、科学技術の発展を通して権力行使の新しい種類が生じる。これはフーコーが語る規律的権力であり、企業、コンツェルン、事務所、学校、軍隊の集中化のなかに現れている。これらは同時に新しい権力手段を生み出すが、新しい権力手段はつねにより操作しやすいものでなければならない。これにともない多くの人——個人であれ小規模の集団であれ——の手へ権力が分割、分散されることとなる。これらの人たちの権力の射程は新しく作り出された科学技術的手段によって拡大する。権力の集中化と分割化はこうして協力し合う。我々の装備の使用と誤用も協力し合っている。その誤用を大規模なおそらくグローバルな射程で集中化は組織化された機関を通して許容する。その誤用を権力の分割もまた個々の小規模な集団によって可能にし、これもまた大規模な可能性においてはグローバルな射程をもつ。権力拡大を目的とする科学技術的な装置の誤用を「テロリズム」と呼ぶ場合、権力の使用は我々の装備の助けによって必然的にテロリズムを引き起こすと言わねばならない。権力をグローバルな射程で行使することが可能なら、グローバルなテロリズムの可能性は常にあるだろう。権力の使用とテロリズムは切り離せない。権力使用の可能性が覚醒するように、同時にテロリズムの可能性も大きくなる。テロリズムとグローバルなテロリズムに対する恐れは、まさに我々の装備が我々に対して持つ権力認識のもう一つの側面なのである。我々は根本的に科学技術的存在である。なぜなら、人類の記憶が遡れる限り、我々は科学技術的な装備を用いているのだから。人間の生の形式として前科学技術的な形式がかつてあったのだろうか。それを我々は知らない。なぜなら、遺された人類初期の装備しか証明するものはない。知られる限り、人間は常に科学技術的な装備に囲まれてきた。この仕方人間は自然の権威から逃れてきた。こうして科学技術は人間的自由の道具として人間に対し自己を示す。飢餓、寒さ、暗闇か

らの自由、病気からの自由、野生の脅威からの自由、最終的には他の人間に由来する危険からの自由。我々は依然としてどの新科学技術に臨んでも我々の装備が有する魅惑的な自由を感じている。我々は車に座って「野外へ [ドイツ語では、自由へ]」走り出るとき自由を感じる。我々は遠い国での「休暇 [ドイツ語では、自由時間]」に飛び立つ。だが、いずれの場合も我々は装備に拘束されている。

我々を自由にする科学技術は、同時に我々を縛り付ける。自然の権力から解放され、装備の権力へ向かうのだ。我々は装備から逃れることができないし、生活形式が他のあり方を許さない。装備の世界を去ろうという試みはどれも「休暇」になり、この「休暇」からはまたすぐいつもの世界へ帰ってくるよう強制されている。我々の先達は事物の強制を知っていた。彼らは場合により、装備に由来する強制を、おそらくこの強制が自分たちにとって新しいゆえに、認識していた。それゆえ彼らは諸刃の剣、トロイアの木馬について語った。この新しい強制から逃れるために、彼らは科学技術でもってもう一つの世界、イメージと概念の象徴的想像世界を創った。そこで彼らは自由かつ人間的に振舞うことができた。科学技術的手段の目的的世界とは反対にこの世界は非目的的世界である。

## グローバルな権力

グローバル化はまず既に述べたように人間の権力拡大の過程であり、それも惑星規模の水準のものである。ただし、すべての惑星規模的な権力展開が人間の作為ではない。気候変動はおそらくグローバルな結果をもつが、グローバル化というときこの過程を意味しているのではない。我々が意味しているのは、むしろ人間の権力展開に由来する惑星規模の影響である。惑星規模の権力展開はしかし同時に、我々に対するそれ独自の権力を展開する装備の世界をもたらした。それとともに、惑星規模の権力は人間のもとを離れていった。グローバル化の過程は独自の権力を展開し、このようにして我々を独占する。我々は自分たち自身の牢獄の収容者になる。あるいは、我々の器具で満ちた贅沢三昧における捕虜とでもいうべきか。

マルティン・ハイデガーはかつて、科学技術ではなく科学技術的思考が我々の問題であると述べた。これは人間的な権力拡大の問題を思考の領域へ移す。我々が端的に正しく、つまり非科学技術的に思考するなら、科学技術が設定したこの問題はすでに克服されている。ハイデガーが見誤ったのは、我々の科学技術が我々を科学技術的思考へと強制すると考えている点だ。我々は科学技術に束縛されていて、それなしにはいられないし、むしろそれなしの状態を望まない。というのも、個々の道具はどれも新しいさらなる権力を保証し、今度はさらなる権力はどれも新しい自由を保証するからである。そうして、権力と権力喪失状態、つまり自由と必然の全体関係が、この過程で持続的に我々の自由と権力の不利になるようにずれていることを我々は認識していないのだ。

惑星規模の権力行使は、高度に発達した技術とそしてまた高度に発達した科学技術的手段を要請する。グローバル化した世界は、かくして、技術的・科学技術的な世界であり、そこでは人間の権力が事物の権力と共生している。我々はグローバルな世界を創設し、創設されるや今度はこの世界が独自の権力を展開する。この世界は人間の営みの結果として存在し、我々にその基準に従って生き、思考することを強いる。これは、人間的権力行使が終焉にあることを意味するのではなく、人間的権力行使が今やある一つの現実に包含されていることを意味しており、その現実に対する我々の権力は失われたのである。

このように自己を表す惑星規模の権力は動機を持たない。それは、あれこれの意図に導かれているのではなく、自然力としてその独自の因果律的な法則に支配されている。グローバル化された人類は地域的な所与性の制約からは解放されているものの、その境界の向こう側で人間的自由が約束されているわけではない。むしろ今度はさらに装備全体によってフィルターにかけられ、そこから我々が自分を自由にしようと試みていた自然の必然性が待っている。解放の行動は、新しく不慣れな束縛という事実で終わる。眼識があるなら、グローバル化した世界の政治が決して自由の政治ではなく、強制の政治であると理解できる。依然として緊急の自然環境の危機という強制の政治、さらに依然として増加し続ける人口という強制の政治、そして最後に、我々自身の科学技術的手段という強制の政治であり、この科学技術的手段をそして我々自身を維持するため我々は科学技術的手段を整備しなければならない。

## グローバルな政治

政治は長い間、限定された射程をともなう権力行使であった。この限定において全ての有名な政治体制は築かれてきた。内と外の区別、この限定された体制のどれもが自分の家の主であり、この体制は外部に対しては独立し主権を有すると決定できるという主張をともなっている。人間的政治のグローバルな段階においてこれらの諸限定は消えている。名目上、諸国家は存在しているが、その内部と外部はもはや長くは厳密に区別されない。人間、貨物、武器、危険、イデオロギーは、国境の杭を超えて出入りする。

グローバルな政治は、人間的権力のグローバルな拡大によって成立した。装備によって我々は、最終的にはグローバルな射程に達するまで権力の射程を不断に拡大することを学んだ。航海術の発達は発達の生き生きとした像を与える。中国とヨーロッパにおける技術的・科学技術的発達は、近代初期に海洋航行する船の建造を初めて可能にした。その後、16世紀にスペインとポルトガルのカラベル船〔三本マストの小型帆船〕が来て、地球を周航した。間もなく、より速くより大きくより武装し、さらに大変強力なオランダとイングランドのガレオン船の時代となり、スペイン・ポルトガルの権力要求に制限を加えた。その後、大英帝国を支える金属製蒸気船が航行する19世紀となった。続いて、グローバルな領空が技術的・科学技術に受け取られる。すなわち、航空機、大陸をまたいだ爆撃、大陸間弾道ミサイルシステム、現代では、ネバダから制御されてアフガニスタン、イラク、シリアに死を分配する遠隔操作によるドローン——これが合衆国のグローバルな権力の今日的な基盤である。さらには、加速する流通が挙げられる。全ての大国と大経済圏がこれを行い、人間と物資が地球をめぐる。

水上と領空のこのグローバル化は、無線装置による新しいコミュニケーションシステムからデジタルのネットにいたる進歩なしにはありえなかったろう。グローバルな流通とグローバルなコミュニケーションは事実、我々のグローバルな世界がその上に建設されている支柱であり、グローバルな政治の条件でもある。これを論じることはこの発表の範囲を超えてしまうので、若干の指摘にとどめねばならない。それは、この新しい政治的現実における哲学の位置づけという問いにとって意義のあるものである。

ここでは特にあらゆる社会的政治的過程の加速が本質的に重要である。ペルシア人によるバビロン征服のあと街の端から端に知らせが届くのに3日を要したとアリストテレスは伝えている。2015年10月15日、ボンベイの取引所はグローバルな株売買を今や6マイクロ秒内に終了でき、その際、速さを200ナノ秒に上げると伝えている。以前は、中国の端から端に、あるいはイタリアからドイツに旅するのに何週間、何ヶ月とかがかったが、今日、我々は数時間でグローバルな距離を横断する。貨物、人間、武器、犯罪者、取引と危険、原料と廃棄物は、最大限の速さで惑星規模の空間をとおして運搬される。情報、誤報、思想、噂は、ほぼ間髪おらずに世界のすべての場所に届けられうる。

この加速は成熟した政治的過程を蝕んでいる。グローバルな過程の加速は政治的な諸問題も加速化しているのだ。政治的諸問題は以前よりも早く発生し大きくなり、直接に効果を発揮する解決を求める。素早い決断の政治が、以前の丁寧な審議と交渉の政治に取って代わりつつある。今は実行力ある人の時代である。議会、委員会、内閣でさえ、しばしば側線〔引き込み線、分岐線〕におかれている。これは民主制において殊のほか痛ましく、非常に判りやすい仕方で、合意形成の政治が決定の政治へと姿を変えている。

カール・シュミットは議会の議論への批判をしている。政治的なものの決定を、敵味方の区別の決定として、つまり全政治の時代を超えた特徴づけへの寄与としてではなく、時代を先取りした描写であると私は彼の批判を読む。政治が、グローバルで科学技術的な世界の新しい条件下で何を意味するかを彼は先んじて描き出している。

世界のグローバル化は元来、経済的関心によって動かされてきた。スペイン人は新世界の黄金を求めた。ポルトガル人とオランダ人は東アジアの香辛料を争った。大英帝国は最果ての島々と植民地のうえに交易の帝国を設立した。グローバルな世界はこうして一つの世界になり、そこでは経済的関心が支配的である。人間の地球上での移動はいまもまだ国境によって制限されている。だが一方では、自由に貨物が大陸から大陸へ運ばれ、最終的な貿易制限は、関係する人々の意思に反して交渉のさなかである。

経済は装備の論理である。世界のグローバル化の過程における世界の経済化は、世界の装備化である。世界の装備化が、生のあらゆる領域を捉えている。我々は、新自由主義の支配を問題にしている。しかし、経済化された世

界は、シカゴの何人かの経済学者のなせるものではない。それは、イデオロギーの表現ではなく、我々が作り出した科学技術的装備と科学技術化されたグローバルな世界の命令形である。この世界では、我々の生のあらゆる側面の機能変化を観察できる。全てが、科学技術的・経済的命形に支配されているのだ。野生の自然は自然保護公園になる。歴史的記念物は丁寧に復元され、観光客の関心の対象にされている。教育は、装備化された世界を維持する者たちの育成へととなっている。

政治もまたこの世界での新しい統制を含む。政治は装備の機械仕掛けで操作され、装備世界のための巨大な管理機構になっているのだ。経済と政治のあいだでの以前の分離や、政治的決定は経済的関心を規制し調整すべきだという思想は、政治と経済が一つのシステムに一体化することで置き換えられた。独立した部局としての国家は終了し、政治的かつ経済的権力を形成する統合体になった。この形成の中で政治的な諸勢力と経済的な諸勢力が分けられる。政治家と経済の諸勢力の分割は消えてしまい、従事する者が一つの立場から別の立場へと移動する循環の中で立場を変えるのである。

グローバル化した世界は、古い構造全てを解消するのではなく、古い構造をグローバル化世界独自の関心の論理へ統合する。共同体、「国家」、「文化」、「伝統」、言語はそのまま残っているが、しかし統合化された科学技術的世界の諸機能として残っているのだ。こうして、この新世界は全体として見通し不可能となる。以前我々が世界を理解した諸範疇は、もはや用いることはできない。グローバルな構造の巨人症の中で人間は身体としてだけでなく精神としても小人化しているのだ。

統合された諸要素という多様性は同時にグローバルな国家の形成を妨げている。というのも、グローバル化とともに我々は同時に自分たちの差異、対立、紛争をグローバル化したからである。それゆえ、今日、グローバルなテロリズムがあるのだ。それゆえ、原子力潜水艦、大洋横断艦隊、原子爆弾、ミサイルシステム、ドローン、人工衛星を有する敵対権力のグローバルな抗争勢力があるのだ。世界国家はなく世界政府もないが、つねに現在化している抗争の可能性が存在し、この抗争はグローバルな世界においてつねにグローバルな性格を仮定できるものである。

このグローバルな構造の一部がその他の部分に対して発揮する持続的な支配もまた存在しない。グローバル化の過程における稼働力は長い間、西洋の手にあった。しかし、グローバルなシステムの全ての部分の平均化と統合化は、これ自体、グローバル化の避けえぬ結果であり、不均衡が持続することを阻むものである。これまで西洋は、全世界が西洋自体と同様に発展の同じ途上にあると、つねに仮定していた。なぜなら、西洋はその近代的な発展を諸制定の権威から個人の自由への進展として、また、少数の支配から多数の支配への発展として理解していたので、同時に、グローバル化の過程は全世界を同一の方向へ強制するだろうと仮定していた。だが、これは今や間違いであったことがはっきりした。そのかわり、様々な歴史と発展の収斂を期待すべきであろう。そして当然ながらその結果、この過程を理解しようとするグローバルな哲学的思考は、西洋人のみにその眼差しを向けることはなくなる。グローバル化は、西洋の諸理念を世界の残りの地域に投影することではありえない。グローバル化の成果は多様な思考法や思考伝統の習合化となるだろう。擬似グローバル的単調さの時代にグローバルな哲学的思考は、グローバル化の人間的な出発条件の多元主義をしっかりと見据えねばならない。

## グローバル哲学

以下の問いがもちろんまだある。つまり、哲学は成立しつつあるグローバルな世界において、かつて世界が置かれ繁栄していた状況からこれほどまで根源的に異なった状況下で、“いまだに”何か意義をなし得るのかという問いである。加速化とせわしなさの時代にあって、ゆっくりと省察する哲学的な思考はどうあるのか。自由に哲学的に概念に取り組むことは、一貫した経済化の時代の中で、自己を有益だと示すべきなのか。もし教育が、装備の維持、世話、増加のための養成に転じるなら、哲学は人文社会系の諸学問とともに大学経営のなかで維持されうるのだろうか。グローバルな政治が、グローバルな経済が、グローバルな金融システムが、グローバルな外交が、グローバルなインターネットが、グローバルな娯楽が、グローバルな紛争がある。しかし、グローバルな哲学がありえるならそれはどのようなものなのか。

いずれにせよ、我々の哲学的思考はグローバルな社会の枠組み内で新しく定義されねばならないことは確かである。孔子やプラトンからハイデガーやジョン・ロールズまで我々は繰り返し社会の精神的導きを哲学者に要求してきた。哲学は、現実の全体像を提供し、自分自身と自分の場所を事物の推移のなかで見ることができる概観を与えてくれるとかつて言われていたのだ。また、哲学は、基準と原理を打ち立て、我々はそれらに従って個人的そして政治的生を整備すべきだと言われていたのだ。そのような要求はグローバル化の時代において今でも現実的だろうか。一部はいずれにせよこれに反対する。第一に、我々の現実を概観することが不可能である。この概観に代わって、今日我々は我々の状況の非俯瞰性を認めるよう強制されている。最終的で最高度の基準を決定するという使命を哲学に与える代わりに、そのような基準は新しい世界の出現にともない全く役に立たなくなったと認めねばならない。さらに、権力の道具がもつ圧倒的な存在感とは逆に、グローバルな現実におけるあらゆる精神的なものの副次化がある。それから、静かな省察に時間も落ち着きも与えない生の加速化がある。我々の注意は数秒へと短縮され、長い思考過程や難しいテキストに忍耐を割くことができない。さらにこのほかに、グローバルな社会全体が政治経済的な過大な負担をもつ統合体の込み入ったネットに融合されることも加わる。さらに、地域的かつ歴史的なものの廃棄も加わる。かつて地域的かつ歴史的なものから我々の哲学的思考は生を得たのだが、今や我々の惑星規模の現実は無名の無時間性の中へ解消されてしまった。これら全てとそれ以上のことが、哲学的な思考にたいするこれまでの要求に反対しているのである。

これに対し、様々な回答が提供される。

(1) 我々はヘレニズムの思想家たちから学ぶべきかもしれない。彼らは同じく、哲学が以前に有した支配的求めが妥当性を失った時代に生きていた。かつてこの要求は、自由で自立し自己管理し、地域的な施設としての古代のポリスに結びつけられていた。ポリスがこの特徴を失ったとき、ヘレニズムの思想家たちは、社会の精神的指導者に対する要求に背を向けた。彼らは自分たちをもはや自分の都市や国家の市民とはみなさず、コスモスの市民、コスモポリタンだと考えた。これによって彼らは、ある新しい人間的生活形式、世界からの隠棲への道を開いた。この隠棲はのちにキリスト教の隠者や修道士において再び高まりを見せた。それゆえ、我々は未来の哲学的思考を想像することができる。そこでは、諸制定と学界の外で、省察する思考の古い技芸 [Kunst] に協力しあって自己を捧げる少数者の営みに哲学的思考はなる。これは常に、世界はいつかこの思考の価値を再び見出すだろうという希望のうちにある。

(2) であるなら、グローバルな時代における哲学的思考は、古き、多様な思考法の維持に、古き哲学的言語の保護に、古典的テキストの読解に、古き、場合によっては時代遅れの思考方法の実践に貢献する心得をもちえるだろう。グローバルな哲学的思考は、したがって、歴史的かつ地域的に多様な哲学的思考を誠実に受容し、その多様性において存立させるということになるだろう。だがこれはグローバルな水準における哲学的な言語不在について語っていることを意味するのではないだろう。むしろ、我々の間でのグローバルな哲学的対話は、異なる思考様式と思考伝統の間にある様々な差異や移行に精確に取り組むであろう。そのような思考は、グローバルな世界の単調性の同時代にあって、正反対なものであるだろう。

(3) 同時に批判的なグローバル哲学の可能性も我々は理解できる。そのようなグローバルな哲学的思考は、この思考自身の現実の諸条件とも取り組まねばならないであろう。そのような思考は、まさに、私が持ち出してきた主題に取り組む必要があるだろう。つまり、人間的権力の拡大、そのグローバルな射程への拡張、まさにこの目的での装備の世界の建設、事物と装備の権力の下に人間的権力がその中から生じる秩序づけへの従属、それによって人間的自己権限付与の本質的形式としての哲学が蝕まれることに取り組む必要があるだろう。これにともなって、最後に我々は決定的な問いに至る。

(4) 哲学的な思考は、とりわけ人間的自己権限付与の過程はつねにあらゆる場所にある。それは、いつでもあらゆる場所で事物と装備の権力に対抗している。哲学的な思考において、人間的な象徴の諸構成における人間の権力が自らを表すのだ。しかし、この権力のうちどれほどが残っているのだろうか。哲学の、そして我々の権力喪失時代において哲学はどうなるのだろうか。



## 注

- 1 訳注：ドイツ語の Macht には「自然の」威力・猛威と訳せるような意味も含まれているが、この翻訳ではそのような力も含意しつつ、用語として「権力」に統一する。
- 2 訳注：ドイツ語 Gerätschaften は機具・諸道具を意味するが、訳者が原著者のハンス・スルガ氏およびマルクス・ガブリエル氏と会話した際、両氏は「特定の目的のために創設・設定された設備・装具・機器・用品」という含みが意図の中心にあると述べていたので、ここでは試みに集合名詞として「装備」、単数形を特定の用具として「装備品」と訳す。